

編集者のための組版講座

編集者は組版の良し悪しを、何によって判断すればよいのでしょうか。

ごく単純に言えば、よい組版とは分かりやすいこと、読みやすいことだと思えます。いま街中には実に多様な組版が存在しています。フォントもサイズも字詰め行数も色も自在に設定可能で、可能性は無限です。DTPは組版に多くの「自由」をもたらしましたが一方で、かつて印刷所に預ければ間違いなく保証されていた「端正な格子」や「明確な階層」は、現在の組版では決して自明ではありません。昔の編集者は「読みやすさ」に目を光らせる必要はなかったのです。無限の自由の中で不自由を抱えたいま、編集者は自らが組版を見る目、良し悪しを判断する力をつけるよりほかありません。

自分の中に良し悪しの基準をもつためには、組版の「ルール」が助けになります。「ルール」というと窮屈に聞こえますが、固定化された規範とは違い、長い年月世代をわたって組版に携わった無数の職人たちが日々の労働の中に蓄積した「集合知」を意味します。この一世紀、印刷は活版から写植を経てDTPへと急激に変化し、とりわけプリプレス（印刷・製本の前工程）の担い手は、工場の工員ら集団から個人へと変わりました。けれど、読者も含む集団の共有財産としての組版ルールは、そう簡単に無効になるものではありません。

この講座の目的は、ソフトウェアの使い方を覚えることでも、流行のデザインについて情報交換することでもありません。組版を見る目を養う、そのための手がかりを知る時間になりたいと思います。

日ごろの編集作業の中で悩んだり考えたりしている問題を互いに持ち寄り、意見をかわして問題解決に役立てていただければ幸いです。

第1回

（9月7日） 昨今、組版作業について「そのまま流せばいい」といった声をよく耳にします。

「流す」ことは組版の仕事にとつて終わりでなく始まりです。違和感なくスムーズに読める組版を実現するためには、細かな調整が必須です。原稿を分かりやすい印刷物にするために文と文の区切りをどう際立たせるか、組版者たちはどのような処理をし工夫を施してきたのか。知る手がかりとして、19世紀末の印刷紙面の変遷をたどり、活版草創期の試行錯誤を通じて作り出された組版の「ルール」を読み解きます。あわせて現在の印刷紙面とも比較検討し、変えてもよいことは何で、受け継ぐべき基本の決まりごとは何であるのか考えます。

第2回

（10月5日）「嘘」と「嘘」の違いに戸惑ったことはありませんか。筆者の強い要望が伝えられることもあるかもしれません。個人の手控えであれば、それぞれの好みでどちらを使用しても間違いではないはず。しかし時代と社会の共有物である活字には、歴史的な根拠と体系があり、それが作り手と読み手との暗黙のルールともなつて流通することを思えば、本来、筆者や編集者の一存で決められるようなものではないはずです。「嘘」と「嘘」、どちらを採用する？ 字体統一はそもそも誰の仕事？ ルビをふる基準は？ —— 好き嫌いで決められない印刷文字とは何か。中でももっとも基本であり多様でもある「漢字」を取り上げ、常用漢文字体、表外漢文字体、簡易慣用字体、簡体字、繁体字といった体系について具体例とともに概説します。

第3回

（11月2日） 組版者の手に渡るテキストは、編集者が整理した原稿であることが原則です。未

整理のまま入稿されれば、組版や校正の作業は煩雑となり、混乱や工程の見直し、誤りの見落としにもつながりかねません。編集の段階でやっておくべき原稿整理には何があるのか、組んだ後で手を入れてよいことと区別して具体的に検討します。もうひとつ、編集から組版への大切な申し送りに、版面の指定があります。組版を行う際の指定にはどのような項目があり、編集が決定すべき必須項目は何か。逆に、組版の工程にゆだねてよい項目は何か。指定の数値は何によって変わり、何を根拠に導き出すのか。読者対象と性格の異なる複数の本の版面例を示しながら、必要な知識を整理します。

第4回

（12月7日） 度重なる工程の見直しは組版、校正、印刷、製本といった後工程までを巻き込み、本作りの行き先を見失わせます。成り行きまかせのページの増減は本そのものを破綻させかねません。編集者が本作りの総監督なら、進行表が羅針盤、台割は脚本といえます。

まず台割について組版の観点から特に、ページ数の割り出し方を解説します。文字数のカウントの仕方、表紙、奥付、前・後付けや、章起こしのスタイル等、ページ数に影響を与える要素には何があるか確認します。まためあてのページ数に収めるための手法や、文字が溢れた際の回収の方法についても提案します。次に進行表の役割について、考えます。その中で、編集、組版、校正等それぞれの工程の責任と権限の境界線や、入稿のリミット、事故が起きたとき、遅れが生じたときの処理で気を付けたいことについても確認します。

●とき 9月7日、10月5日、11月2日、12月7日（毎月第1水曜、全4回） 19時～21時

●ところ 「会議室」 読書人となり（東京都千代田区神保町1-3-5 富山房ビル6F 電話03-5244-5975）

●参加費 一般2000円（事前予約1500円）、オンライン2000円（事前に資料郵送のため、申し込み切は各回1週間前まで）

●講師 前田年昭（組版者、第1～4回）、朝浩之（元・東方書店編集者、第2回）、大友哲郎（組版／校正／編集者、第3回）

●主催 問い合わせ／申し込み先 読書人（電話03-5244-5975）

※受講者は、組版についての現場での具体的な問題、事例の実物を、お持ち寄りください。

※事前予約者、オンライン受講者には毎回、豊富な事例資料集を事前配布するため、各回の1週間前までにお申し込みください。